月刊 twitter 文芸部九月号（No.12）

目次

1

特集「色彩と音響」

短歌　鈍いいろ　あんな　2

創作

ネイヴル　安部孝作　3

雪　鋼　常磐誠　5

コラム

ツイ文党員６とＯとＫの冒険　崎本　智（６）　14

短歌　鈍いいろ

あんな

少しだけあと少しだけ青が足りないもう少しだけ呼吸するには

苦しくてひねる手元のボリュームはいつもなにかを拒んでるふり

悲しみの色水溶かして街中にゆっくり注ぐ犯罪行為

パレードの最後尾からおもむろにナイフ手にして歌う賛美歌

自慢げに取り出す絵の具をぶちまけて手っ取り早く絶望しろよ

濃紺の夜の絨毯ひろげたらキャンプファイアの準備するころ

赤い服着てビル街の隙間からそっと見守るベンチの会話

黒い爪かさかさになった指先を撫でるしぐさは夜に似ている

すれ違う駅のホームの少年のヘッドフォンからプルトニウムが

あまりにもかたむきすぎた階段をくるぶし使って登る水鳥

〈了〉

ネイヴル

ネイヴルオレンジ
皮の冷たさに
爪痕つける
唇の熱、
わたしは撫でた
球体の感触を。
面皰の
噴き出そうな赤
悪意なく刺激する
薬指の腹、
お前は覚えた
球体の感触を。

鴉の澄んだ鋭声が
夕暮れに死の歌曲を奏でた、
お前の気息が吹き抜け
静寂の波紋の、広がる
緑の底
――暗い底

安部　孝作

眼窩の奥
留まらない、瞳
山裏へ沈むよう
裸のまま、
忘れて飛び去った。

夕陽を瞼に潰して
歯間から溢れた果汁
口角から垂れ
顎先に留まる芳香、
桟橋に押し寄せる
黄金の漣、
山間に響く
低木樹の歪音、
熟れ過ぎたネイヴルオレンジ
臍から裂けて
漏れ出した果汁
粘ついて、糸を引いた

ネイヴルオレンジ
皮は、もう温い
お前の小さな掌に

包まれて。
それは、水銀計に示された
懐かしく、愛おしい、温度――
白桃のように脆い
お前の、太陽を知らない肌
朱色に染まった
関節の、球みから
今に滴る、汗の、温度。

鴉の澄んだ鋭声が
夕暮れに死の歌曲を奏でた、
手を翳すお前の
心悲しげな口笛が
昨晩の輪舞の、旋律と
知れた時――
わたしの心臓は、
忘れようと
大きく、脈打った。

自然の気炎に曝されて
腕の中――融け始めた
お前の――わたしの――偽った
蜜蝋の肉体

山腹の街から吹き降ろした
風が
枯れ葉で覆い
一打ちで火が放たれた。

夜闇を映した鏡面を前に
月は立ち尽くし
底を閉ざした
湖。
青黒く湿った大気に
淡く浮かんだ燠火は
間断なく爆ぜ
音と灰を、遺した。

〈了〉

雪鋼

常磐　誠

山頂に一台の車が止まっている。タイヤにはチェーンがつけられていることがよくよく見ればわかるが、その体全体に重く覆い被さった小さな結晶の纏まりが伝えるには、この車に久しく動いた形跡は見当たらない、ということだ。

その車の側で一つ、声が聞こえる。少年のような、明るくて、高く、そして通る声だ。

「何日だっけ？」

その声に答えたのは、若い、中性的でありながらも母性のような柔らかさを感じさせる声だった。

「まだ一週間も経っていませんよ。マウロ」

マウロと呼ばれた少年は、そうなの？ という懐疑の顔を一瞬だけ覗かせたが、

「この山は食べるものに困らなくって助かるね」

という言葉だけを残して、車から離れて行った。

ここで足止めを食らってから三日目。これは春になるまでここで過ごすことになることを考えなくてはいけない。若く中性的でありながらも母性のような柔らかさを感じさせる声を持つ者が、声を発さずにそう思った時に、

「ただいま。マユナ。今日も良い感じだった。本当にここは食糧が豊富だ」

鍵のかかった小さな手持ちの籠と、大量の野草を入れた背負い籠を積もった新雪に降ろしながら、ユタカが言った。

「ご苦労様です。ユタカさん」

マユナがそう言いながらユタカの置いた手持ちの籠を持とうとすると、ユタカはそれを左手で遮り、無言で首を振った。これは重いよ。すぐにそう小さく呟いた声はマユナの耳にようやっと届くくらいで、決して強くはなかった。体つきもそうだ。百七十を超える背丈は男性としては標準的でしかない。体格的な、男性的な強みをユタカは持っていないと言って良いと思う。それでも、ユタカは行きは歩きで三十分、帰りは一時間かかるような冬の山路を、二つの籠を持ったまま走って行くのだ。当然、帰りの道には釣れたワカサギを生かすための水が入る分、重みは段違いになる。それを持ち、ユタカはこの六日間毎日走り続けていた。そしてこれから先、春が来るまでそれを行うだろう。それを誰が頼んだでもない。端正な顔立ち。目立つことはなくとも、屈強な肉体と精神。マユナは疲れた様子を微塵も見せずに走るユタカの背中を見ていた。それから間もなく、

「寒くない？ マユナ」

何時の間にかまた車の側にまで出てきていたマウロの問いに、マユナは、

「えぇ。少し冷えてきましたね。やっぱりここは寒いです」

微笑みながら返した。あなたは大丈夫ですか？ その問いかけに対

してマウロの方は、
「うん。大丈夫だよ。だって、ほら」
マウロは自分の両腕を地面と水平になるまで上げて見せた。翡翠色の冬毛に全身を覆われた姿。雪に接して霜焼けを起こさぬよう持ち上げられた長い尻尾。そして答える。
「ボクはヒトじゃないんだから」
そう言うとマウロはマユナに抱きついた。ふわふわした毛と、マウロの体温。暖かくて、やわらかい。マユナはひとしきりだけマウロの頭や体を撫でてから、両腕を解いた。ありがとう、という一言も添えて。
「えー。もっとぎゅーってしてたいな。あったかいからいいじゃん」
マウロはそう言ってマユナの右腕を掴んでゆさゆさと振ってきた。
「ダメです。いつまでもそうしていたってどうしようもないでしょう？ 夜ご飯も作れませんよ」
なだめるようなマユナの声を聞いて、マウロはしぶしぶテントへと歩き出す。マユナがその横についている。マユナと一緒にのっしのっし、新雪に足跡を残す。ヒトの足跡。マユナの足跡。ヒトでない足跡。ボクの足跡。少しだけ、笑う。マユナが傍にいてくれる。そのことがやっぱり嬉しかった。
次の日にやっぱり太陽は昇った。けれど雪は溶けない。積もりに積もった雪に、わいきゃい。わいきゃい。子ども達の声が響く。ぼすん、ぼすんとマウロの足が雪を踏みつけ大きな獣の判子。その傍にマフラーに分厚いコート、そして更に手袋着けた二人の子ども。二人ともが、雪の中で浮き上がるような黒を身につけて、でもその表情からは黒く分厚いコートに手袋やマフラーの重さは感じさせない。四つの踵。四つの足跡。ふしゃ。ふしゃふしゃふしゃ。小さな長靴で出来た四つの判子は小さく、そして同じ大きさだった。
ぴっぴ。ぴっぴ！ 笛を吹く女の子。ぴぴぴっ！ ぴぴっぴ！ 何重にも重ねられた無数の判子は実体を判別出来ないまま白い結晶を地面に変えてゆく。その横で女の子の手を握り、女の子がバランスを崩してしまわぬように支える男の子の顔は、その女の子の顔のそれと同じ。同じ顔。
「はしゃぐのは良いけどさ、気をつけろよ。キーサ。危ないだろ」
しょうがないなぁ。小さなため息混じりに放たれる言葉と呆れるような声。
「ギースは過保護なー。こんな雪の中じゃ頭打ったって何もないのにねー。まったくもって過保護なー。ギースはかーほごー！」
答えたのはキーサではなくマウロだった。ゴローン！ 踏み固めて作った小さな山の天辺から、後ろ向きにマウロは転がり落ちて見せて、
「なー」
きゃっきゃと笑いながら尻尾と手足で雪を叩いた。叩かれて舞う雪がキーサとギースに降り注いだ。ぴっぴぴ！ という笛の音と、
「何すんだよこのデブ！」
という声が同時に響いた。
「誰がデブじゃチビ！ ボクは適性体重だ！」

マウロのもう何度繰り返されてきたかわからない反論と侮辱が帰っていく。こうなれば売り言葉に買い言葉だ。ギースはこう言う。
「うっるせーんだよデブ！ 僕は10歳の平均身長だろうが！」
マウロの言葉はこう続く。
「お前こそうるさいんだクソチビ！ 僕だって 10 歳の平均体重だろ！」
そしてこんな感じに続いていく。
「お前何キロだよ」
「90kgだよ」
「それのどこが平均体重だよ太り過ぎだろダイエットしたら？ クソデブ！」
「言ったなこのチビすけ！ マユナが調べた文献でボクの体重がこれくらいで問題ないっていうのは確認済みなんだよバーカ!! お前こそそのちっこい体をカバーするためにマユナにシークレットシューズでも作って貰えばー？」
「何だともう一回言ってみろよデブ！」
「何遍でも言ってやんよ双子の妹よりもチビなギースのクーソっチビー！」
「ふっざけんなブッ殺してやる！」
この言葉の流れをまだキーサは聞いていない。……あくまでも今日は。だが毎日のように飽きることもなく、多少のレパートリーや言葉のズレはあっても同じ意味しか繰り返していないガキ同士の口喧嘩に、もうキーサは飽ききっている。自分も同い年のガキであることは一先ず棚に上げておき、ぴー、という小さな音をたてた。この音が「男子ってガキよねー」という意味合いを持つものであることは未だに飽きもせず口汚く罵り合っているガキ二人に限らず、聞いた者になら容易く理解出来そうなものではあったが、今回のぴー、はキーサ以外の誰の耳にも入ることはなかった。
さくっ。どさっ。さくっ。どささっ。動かない車の上に積もった結晶を地面に降ろす。ユタカ、遍、マユウの男衆は誰も何も言わず、黙々と作業だけを続けていた。
遠くの小さく盛り上げられた白い山の辺りから、二つ、怒鳴り声が聞こえてくる。きぃきぃ。やぁやぁ。子どものケンカ。興奮して、甲高くなって、風に乗って鼓膜を揺らす。きぃきぃきぃ。やぃやぃやぃ。
「ガキどもは平和で良いっすね」
遍は手袋を填めた手で車体の上に固まった結晶を払い落とす。落ちた結晶は下の結晶と同化する。落ちるまではちょっとだけ違う結晶。でも、落ち切れば、他と同じ結晶。もう見分けはつかない。何故そんなことを思ってしまうのだろう。何故、そんな結晶に興味を持つのか。師匠とユタカは一瞥もくれず結晶を落とし続ける。この結晶を溶かして熱して飲み干す。その繰り返しで幸いにもこの場所で渇くことはない。
「遍もあの中に入りたかった？」
ユタカは遍に近づいて声をかける。昨日マユナに声をかけたような、穏やかな声ではなく、どこか楽しげな、軽いおちょくりのよう

なトーン。表情をみればわかる。イタズラをしかけるような、周りを埋め尽くす結晶以上に眩い歯を見せて無邪気に笑って見せていた。
「……勘弁してくださいよガキのお守りなんて。五月蝿いのは嫌いです」
あれ、そうだっけ。……柔和で、穏やかで、優しいのに、どこかやんちゃで楽しげな声。不思議な声だ。遍は思う。自分と同じ人間だというのに、どこかで惹かれる部分がある。何に、どこに、という具体的な世界ではなく、いつの間に、心の中の何処かで、ユタカという男に惹かれる。師匠や姉さん、他の連中の中にもユタカの存在や軽口を批判したり、嫌悪したりする者はいない。皆が口にはしないがユタカという男に皆がどこかで惹かれているのかもしれない。
「……方はついた。戻るぞ」
マユウがユタカと遍、両方に聞こえるだけの声で伝え、テントへと戻って行く。うん。了解です。二人は先をゆくマユウの一、二歩後ろを横に並んで歩いた。歩いている最中、誰も何も言わなかった。地面に残る三人それぞれの足跡の、体つきよりも小さいのを見れば、そこからは体重の乗せ方の工夫を思わせる。はしゃぎたてるような歩き方はしないで、常に早足で歩き続ける。無言であるにも関わらず、音は聞こえない。地面の結晶を踏み砕くことも踏み締めることもしていない、まるで浮いているような感覚を呼び起こさせる程、三人は無音だった。
三人がテントに戻ると、そこには何か白くて丸い、人抱えあるくらいの物を大事そうに抱えるマウロがいた。また何か変な物を作ったか、それとも拾ったか。好奇心で軽はずみに動くマウロに対して三人はあまり意識を向けることはなかった。もう慣れていたということもあるが、それ以上に、
「あ、こんにちは。自分はユキヤと申します。マユナさん達に助けていただいて、足もない状態なもので、しばらく置いていただけることになりました。お世話になります」
テントの中央、銀髪の若い男がそうやって頭を下げている姿の方に意識も視線も向いたことが大きかった。
「新発見！ 超発見！ 大発見!!」
マウロが興奮して叫び両腕に抱えたまん丸の物体を抱え上げる。ここでようやくユタカが気づく。
「ん。そういえばそれってここら辺の木によくなってる実だね。それがどうかしたの？」
マウロは興奮冷めやらぬ感じで鼻息荒く、これユキヤのお土産！と叫びながらテントの中、テーブルの上にどんっと音を立てて丸い果実を置いた。これすんごく美味しいらしいよ！ という声まで上げて。
「分かりやすく訳してやると、早く食いたい、食わせろ！ だな」
遍が呆れたように言うと、コロリン！ マウロはテントの中で転がりながら、
「その通り!!」
元気よく答えた。ニコニコと笑うマウロを横目にしながらユタカはマユナに話しかける。

「相当ご機嫌だけど、でもあれは硬いよ。たぶん包丁やナイフなんかじゃ歯が立たない。というより、あれは食べられるものなのかな」
「ユキヤさんが仰るには大丈夫だそうです。ただ、ユタカさんの言う通り、途轍もなく硬い皮が曲者なのだそうで、ユキヤさんの国でもあの皮を割るのに特別な機械を導入する程なんだそうです。……ちなみに、高級食材なんだそうですよ」
　ユタカの質問にマユナが耳打ちする。細い、柔らかな絹のような声。二人の視線の先にはゴロンゴロンと転がるマウロの姿がある。二人は、それを見る。
「あの子のはしゃぎっぷりも相当ですね。まだ食べてもいないのに」
　柔らかく笑うマユナにユタカは言葉が出てこなかった。あまりの寒さに舌が凍えてしまったのかと思った。でも、そんなバカな。すぐに思い直して、
「ユタカさんも、やっぱりおかしいと思うでしょう？」
　マユナの言葉に相槌を打つようにして笑った。その笑顔の理由や意味がマユナの意図と違うことを、マユナに触れていない今なら気づかれることはないと思った。
「しかし、あんなに大量にある物が高級食材だなんてね」
　ユタカは今まで抱いていた気持ちをマユナが察してしまわぬよう、話題を元に戻す。
「えぇ。ただ、大量にあるとは言ってもあの実が実るのはこういった山頂付近のような高所だけで、しかもあの皮の硬さです。ユキヤさんの国でもあの硬さに相当手を焼くみたいで、機械は高価でなおかつ壊れやすいんだそうですよ」
「なるほど。あの実自体が高いというよりは機械が高い故に高級食材、と。面白い話ですね」
　ユタカよりも先に遍が返事をした。
「ま、俺には物の高い安いはわからないよ。それより問題は味なんじゃないかな」
　ユタカの返事は遍と比べればシンプルなもの。
「その通りですね。では準備をしましょう」
　マユナがテーブルから果実を取り上げるのと同時に、マウロの目が分かりやすく輝いた。マユナはそれを持ったままテントの奥に佇んでいたマユウと一言二言会話を交わすと、すぐに戻り、テーブルの上に果実をを置いた。マウロはそれと同時に慌てた様子でマユナに追いすがる。
「マユウは何だって？」
　ユタカが聞くと、右腕に果実を抱えたマユナは特に表情を動かすことなく答えた。
「俺の刀であんなものを切るな。だそうです。別に構いやしませんよ。働かざる者食うべからずです」
　マユナはそのまま後ろで自分の左腕にまとわりつくマウロの方に顔を向けてなだめるようにして、
「そんなに食べたいのに～っていう呪詛を放たなくとも、ちゃんと手伝ってくれたら食べられますから」
　と伝えた。マウロの目に輝きが戻るのは一瞬の出来事で、それを

見ていたユタカや遍は無言のまま呆れ、ギースは、
「食い意地張りまくりのデブめ」
と一言放ち、マウロから睨まれていた。マウロがギースに掴みかかるようなことになる前に、
「では、あっちで準備しましょう。マウロ、手伝ってください。キーサさんもギースも一緒にお願いします」
二人の間に入る一言でマユナが止めた。ぴぴっ。笛の音と一緒にキーサは立ち上がり、ギースはぶつぶつと文句を言いながら、四人で一緒にテントの奥へと消えていった。
さて、と。四人を見送った後、遍がユキヤに向けて大仰に口にした。一つの問いかけ、というよりも、詰問の合図。食べ物に見事釣られたマウロは論外として、子どもの前で客人を疑うような真似をすることを多少ためらっていた遍にとって、今は良い機会だった。
「ユキヤさんはどこからいらっしゃったんですか」
「すぐそこですよ。山を東側へ降りてすぐの国です。丁度自分は出たばかりなんです。……こんなに雪が積もっているなんて思わなかったです……。スノーモービルで登って来たのですが……いやはや、こんなにもあっさりと壊れてしまうとは。あの吹雪は大変でしたね。皆さんも無事で良かった」
その国は自分達がこれから向かう国だ。丁度その国からの人間と出会えたことは、なるほど都合が良い。国についての情報が手に入る。
「どんな国なのですか？」
「良い国ですよ。本当に素晴らしい国です！ 四季の一つひとつが美しく、筆舌にも尽くし難い程です。アハハ、まぁ……今年は冬がちょいと、強烈過ぎますけどね」
国を敬愛し、好き好んでいるこの男がどうして国を出ることにしたのか。気になった遍は聞いてみることにした。
「国を出るのは簡単なのですか？ どうしてこのようにして国を離れることになったのか、非常に差し出がましい質問ではありますが……」
「あぁ、どうか気になさらないでください。いえいえ。単なる観光旅行みたいなもんです。自分の足で動き回る旅というものに憧れていたもので。……国の中は、正直広いとは言い難いですもので。もう全てと言って良いくらい踏破してしまいました」
「旅行がお好きなのですね」
「ええ。様々な場所の文化や様子を見るのは本当に興味深く素晴らしいことです」
「……ただ、正直今回は舐めていたのでは？」
遍は話を切り出した。
「まず貴方の旅荷物は軽過ぎる。スノーモービルが動かなくなったことは多少予想外の出来事だったとしても、それでももっと大量の荷物を用意しておくのが普通かと」
「えぇ。そうですね。これは失敗でした。皆さんに出会えていなかったら野垂れ死にはまぬがれなかったでしょう。感謝していますよ。そして落ち着いたら皆様と一緒に故郷へ戻るつもりです。歓迎いた

しますよ」
「誰が言った」
マユウが厳かに告げる。
「……え？」
ユキヤは今自分が何を言ったのか、というより、自分の言ったことの何が問題だったのか、わからずにいた。
「誰が次の行き先がお前の故郷だと言った」
「え……マユナさんが、確かそう仰っていませんでしたか？」
「仰ってないですねぇ」
綺麗に人数分に等分された真っ白の果実を持って戻ってきたマユナがそう言いながら笑顔で戻ってくる。
「どうぞ。高級食材だったそうですし、まだ食べたことがないとおっしゃられていましたね。どうぞ」
その内の一つをユキヤに差し出す。その時だった。
「動くなぁ!!」
ポケットの中から取り出され、マユナの頭に押し付けられたのは、小型の拳銃。ユキヤは黒く、鈍く光る拳銃をマユナに押し付ける。マユナのパーティーはユキヤを取り囲む。
「あらあら。捕まってしまいましたね」
そう言ったのは、他でもないマユナだった。
「えぇ。捕まえてしまいました。大丈夫ですよ。貴女が最初に逝ってしまっても、すぐに皆が後を追ってくれますから、安心してください」
「なるほど。それが貴方の『仕事』ですか」
おとなしくしたまま、少しおどけたようにして言うマユナの後頭部。強く押し付けられる拳銃。撃鉄に指はまだかかっていない。マウロがグルルッ！と唸る。その目には明らかな殺意が見える。
「大人しくしていなさい」
そう言ったのは、
「貴女がそう言ってくれると助かりますよ。マユナさん」
マユナだった。
「どうしてこれが私の仕事だと？」
穏やかに、だが頭に強く押し付けられた拳銃だけは離さずにユキヤは尋ねる。この拳銃さえなければ、それはまさしく穏やかな会話でしかないように見える。
「山の中腹にスノーモービルが一台放置されていましたね。うちのメカニック曰く、全く問題はない、とのことですが」
「うちのメカニック？」
ユキヤが怪訝な顔をして周囲を見回すと、
「ボクだよ。あれさ、随分こまめに手入れされてたよね。もうさ、ボク達から巻き上げた荷物とか大量に引き揚げて持って帰るつもりですって感じ」
マウロがトーン低く言うと、
「あぁ、この仕事は殺した旅人の荷物の中に紛れ込んでる金目の物とかって、あるだろう？ 全部仕事をした人間の取り分になるんだよ。良い仕事さ」

何でもない、という風にしてユキヤは語る。
「てゆーかさ、勝てると思ってるの？ この人数に？ 立った一人で」
ギースの手に握られているレイピアがひらり、翻ると共に微かな光の軌跡が見える。
「ははっ！ 勝てるかとか、そんな問題じゃないんだよガキが!!」
唐突に言葉を汚らしくしたユキヤがマユナの頭から拳銃を離し出口側へ発砲する。そこにいたユタカはキーサの手を握り一緒に避けた。その穴を縫ってユキヤはマユナと共にテントを出てゆく。
「さぁて、お前ら、全員武器を全て捨ててもらおうか。安心しろ。金目の物は全部ありがたくいただいて、金に変えてやるよ」
一先ず全員が武器を捨てる。捨てながら、ユタカが尋ねた。
「そういえば、仕事の内容を聞いていないな」
それを聞いたユキヤが答える。
「無駄口を叩くな。……と言いたいところだが、冥土の土産だ。答えて置いてやろう。我等の国に獣人は入れない」
獣人、という単語の瞬間に皆がマウロを見る。
「失礼だな！ ボクは龍人だぞ!!」
憤慨するマウロだったが、
「どちらにしても同じことさ。お前みたいなケダモノ。みているだけで吐き気がする。そしてそれを当たり前のように受け入れるお前らみたいな連中も。本当に理解し難いよ」
冷酷にユキヤは拳銃を改めてマユナへと向ける。
「さて、それでは武器を捨て終えたところでお前ら全員外に出てもらおう。それから、全員処刑だ。ケダモノ。お前は最後にとって置いてやる。お前だけはゆっくり嬲り殺しにしてやるよ。ククハッ！」
ユキヤが先導する形で全員がテントの外へ出る。
「しかし、このようなことをする人がいる国が素敵な文化や歴史を作っているとは思い難いですね」
マユナの発言に、
「末期の言葉か？ 我等の国は汚れた獣人の血を排除することで作られた崇高な国だ。貴様らのようなケダモノ好きにはわからんだろうがな」
ユキヤは答えた。マユナの返答は、一瞬。
「えぇ。わかりまーー」
その言葉を、ユキヤが聞くことはできなかった。
ねぇ。雪の積もった山頂で、よく通る少年の声がした。その少年のような声の持ち主は、自分の腕に特別な色がついていないことを確認しながら、無事に開放されたマユナに向かってしゃべりかけていた。
「この人はさ、今日、ここでこうやって死ぬことを予想できていたのかな」
その少年とその仲間の前には、一人の男の死体が横たわっていた。仲間などでは決してない。でも、行きずりの死人という訳でもない。少年にも答えはわかっていた。
「わからなかったことでしょうね。そしてマウロ、あなたもその答えはわかっているはずです。そういうものなんですよ」

マウロと呼ばれた少年が答えを発した女性の方を振り向いて、言った。
「うん。でも、やっぱり、……そういうものなのかな。マユナ」
マユナと呼ばれた女性はもう一度、短く答えた。ええ、そういうものです、と。その言葉を皮切りにして、仲間が一人、また一人、拠点としていたテントへと戻って行く。積もった雪の冷たさがわかる。雪は降っていなくとも、昨日まで降り続けた雪の溶けることはない。
「寒くない？ マユナ」
マウロの問いに、マユナは、
「えぇ。少し冷えてきましたね。やっぱりここは寒いです」
マウロに対して微笑みながら即答した。あなたは大丈夫ですか？
その問いかけに対してマウロの方は、
「うん。大丈夫だよ。だって、ほら」
マウロは自分の両腕を地面と水平になるまで上げて見せた。翡翠色の冬毛に全身を覆われた姿。雪に接して霜焼けを起こさぬよう持ち上げられた長い尻尾。そして答えた。
「ボクはヒトじゃないんだから」
マウロはテントへと歩き出す。しばらくしてから、
「でもまぁ、最後に土産はくれたね」
側の木になっていた果物を取った。あの時裏でつまみ食いしたおいしい果物。テントまで我慢できませんか？ マユナの声も聞こえないフリで、しゃく！
その瞬間、どさり。木から雪の落ちる音がした。誰も振り返ることはしない。さっきまでそこにあった泣き別れの首は、何時の間にか見えなくなっていた。

〈了〉

ツイ文党員6とOとKの冒険―

『よもつひらさか往還』読書会

崎本　智（6）

H感化院に職を得たスミヤキ党員Qが党の密命をおびてこの島に到着したのは昼まえのことであった。数時間のつらい船旅ののちにはQは島の船着場に着いたのである。Qが乗ってきたのは古い木造の漁船を改造した定期船らしかったが、乗客はQひとりだったし、粗末な木の長椅子の並んだ船室のなかば以上はひどい魚臭を放つ木箱で占められていたので、Qは自分が乗客であるというより、積荷のあいだにまぎれこんだ密航者であるような気がしていた。「まるで囚人護送船で流刑地に送られたみたいですね」とQは桟橋に荷物をおろしてくれる漁師に冗談のつもりでいった。

（倉橋由美子『スミヤキトQの冒険』）

出発またはプロロゴス

ある目的を達成するためにツイッター文藝部員6が部の密命をおびて地元駅に着いたのは、午前九時を過ぎたばかりだった。前日の一夜漬け的な準備に少し疲労を感じながら、滋賀県のある駅に着いたのである。そこで涼しげなシャツを着た若い男と出会う。同じ部員のK崎（以下K）だ。われわれはツイッター文藝部という奇妙な活動に従事している。そう、文学という何か巨大なものに魅了されたひとびとの集まりである。日夜（主に夜）、文学についてのあれやこれやをけんけんがくがくと議論しているのだ。その活動にいまのところ終わりはなく、じょじょに勢力を増している（はず）のだった……。

Kは忘れ物をしたらしく、それをとりに戻ったため遅れてしまったのだった。わたし、6は普通に遅刻していた。われわれ二人は京都である人物と落ち合う予定だ。

そのときわれわれが主に使う通信手段「reply」に『よもつひらさか往還』を持って立っています」と唐突な連絡が入る。そう！その連絡をよこした人物こそわれわれがこれから会う予定であるOという人物だ。

Oは活動を開始する

ミスタードーナツのまえでひとりの男性が仁王立ちをしている。肩にはやたらめっぽう重そうな鞄をさげてはるか前方を睨んでいる。

「小野寺さんこんにちは」とKと二人で挨拶をする。

O野寺（以下O）は、『よもつひらさか往還』などまったく手にはし

ていなかった……。
こうしてわれわれ三人はそろう。これからバスで糺の森古本市に向かうのであった。
バスでは後ろの席からOの笑い声が絶えない。ふだん「reply」とは別の通信手段「skype」でその笑い声を聴いているので、京都の街中にOの声が聞こえるのはある種、幻想的でもあった。
「あ、古本市の旗がたっていますよ」この旅はだいたい、一番年下のKに導かれてOと6がそれについていく感じだった。Kに感謝。一時間ぐらいかけて長いバスの道のりにようやく終止符がうたれ、われわれは古本市の開かれる下鴨神社に到着する。

夢のなかの下鴨

下鴨神社と糺の森は神秘的な場所だった。いくつもの樹が群生してトンネルをつくり、終始林の中は湿気につつまれていたが木陰が温度をさげていたので、快適だった。
とりかこむのに手をめいっぱい広げた大人が四〜五人はいるのではないかというぐらいの大きな樹がところどころに映えていた。雷にやられたのか黒焦げになり半分に折れた樹もある。われわれはお参りをすませて、林のなかを探検していた。苔むした地面は露でつやつやと光っている。小川には文字通り無色透明の水が流れている。もののけ姫の森のような神秘的なその場所をぬけると異様なほど沢山テントが張られた場所があり、そこには古本が何百冊と陳列されてあった。テンションMAXでわほほーいという感じでわれわれは物色しはじめた。絶版になったことが悔やまれ、なかなか読むことができない後藤明生なども三冊ぐらい並んである。ベケットの見たこともないような書物もある。
古本屋の店主と話をしてみる
「どうやってこんな大量な本を持って来たのですか」
「わたしら、神戸から4tトラックで積んで持って来たのですよ」
宇野鴻一郎の官能小説がずらり並んだ本棚に6はどきどきしていたのであった。
神秘的なできごとがおこる。それは局所的に雨が降るのだ。少し前方は晴れているのに、半径十メートル圏内は雨が集中的に降っている。それも一分もすれば止む。それが断続的に何度も繰り返される…。糺の森が見せた奇蹟。何となく文学少女的な気持ちで妄想していた。Kはル・クレジオ『大洪水』のめちゃくちゃかっこいい装丁の古本を八〇〇円と言うお値打ち価格で購入していた。Oはなんだかマニアックな小説を購入していた。6は辻邦夫『小説への序章』東浩紀『郵便的不安たち』を購入した。

○の写真

夢の中の下鴨

『よもつひらさか往還』読書会

読書会をおこなう場所の貸し会議室に到着した。

本日の貸出者一覧の看板にちゃんと「twitter 文芸部」という文字があったときは感動した。いつもツイッター文藝部はネットの中にしか存在していないので、こういう実体をともなって現れたときには妙に感動を覚えてしまうのだった。途中ローソンで買った「コーヒー」「カフェオレ」「抹茶オレ」などそれぞれの飲み物を広げていよいよ読書会は始まる！

・作者倉橋の豊富な古今東西の文学の知識を体験でき、大変おもしろかった。

・初期の倉橋作品は「恋と革命」について描いていたけれど「よもつひらさか」では、奥行きが感じられない。<党>という概念もなく、快楽が描かれている。

・その政治的なものから離れて、性的なものへ導かれていくのは現代の状況とマッチしている。

・死体愛好やカニバリズムなどのグロテスクな趣味もこの小説には入っている。

・シュルレアリスムの観点からもこの小説は語ることができる。

・九鬼さんのキャラクターが生きている。死んだりして、この小説がある種転調するんだけどちゃんと元の場所に戻って来れているところがすごい。

・「髑髏小町」の短編がとくによかった

などさまざまな意見が飛び交い、最後には好きなシーンの朗読をして読書会を終えた。

シュルレアリスムとアレゴリーとシンボルの話

時間が余ったのでホワイトボードを使って即興で「文学の授業」をしようと言うことになった。

Oは高階秀爾の本を使って「シュルレアリスム」についての講義をしてくれた。さすが元教員だけあって板書とか立ち居振る舞いとかは先生らしいものを感じさせて、講義も大変分かりやすく刺激に富んだものであった。

つぎに6がベンヤミンを参考にしながら「アレゴリーとシンボル」の定義を説明して理想の文学作品について語った。あっというまの二時間が過ぎてわれわれは貸し会議室をあとにした。

文学しりとり合戦

6おすすめのグリーンカレーの店の開店時間が一七時半からだったので、近くの百万遍知恩寺で夕涼みをすることにした。夕涼みと言っても、うだるような暑さはまだ地面にたんまりと貯えられていたので頭の中が三人ともぼーっとしてうまく働かない。

そこで文学しりとりをして時間をつぶそうという妙案がだされた。小説家・作品・登場人物……文学に関わることなら何でもOKのしりとり、二人は何となくめんどくさそうだったけど、わたしはがぜんやる気だった。Oは卓越した文学知識でつぎつぎと一瞬でひらめいていく「有吉佐和子！」「多和田葉子！」などの女性作家を巧みに用いながら、「コ」攻撃をいやらしく続けていた。そのうちOはお寺の鐘の下で寝そべっていつのまにか柱についた蝉を見上げている。

「この位置だとおしっこひっかけられるかも」と言いながら呑気に寝そべっている。

夕涼み

グリーンカレーの誘惑

午後一七時半になり、例の店が開店すると同時にわれわれは食卓につく。

そして三人が三人ともグリーンカレーを注文して「辛い、旨い」言いながらばくばく食べる。ココナッツがまぜてあるから辛いんだけどクリーミーな絶妙な味だった。

他の部員のひとにも食べてもらいたいなぁと思うことひとしきり。

そこで何を話したかも覚えていない、三人で汗をかきながらカレーを食べていた記憶しかない。Oと6は緑の唐辛子まで食べつくして

いた。

帰宅またはエクソドス

七条駅まで電車に揺られて、もう電車に乗るころには三人とも疲労でくたくたになっていた。三条駅から、京都駅までは徒歩圏内とOとKが言うので、そこからは歩くことにした。

Oが「6さんぐらいの年齢のときは毎日ここでマック食べていましたよ」と在りし日の情景に思いをはせていた。

夜の京都。鴨川をわたるときには涼しい夜風が吹き渡り、三人のあいだを通り抜けて行った。そして京都駅に到着、新幹線で東へ帰るOと別れて、わたしはKと共に滋賀県へ帰って行った。

遠い中来てくれたOと読書会の手筈を整えてくれたKに改めて感謝します。そしてiphoneがつぶれてしまい、せっかくの音声がなくなってしまい申し訳ありませんでした。

〈了〉

活動報告

■第９回座談会
日時：8/1(水) 21:00～
場所：skype チャット
ホスト：牧村拓
テーマ：文学と私、その間にあるもの
内容：文芸に携わる者として、自分と文芸の間にあるもの。
たとえば創作の原動力であったり刺激を受ける他分野であったり、
そういったものをテーマとする。ホストからいくつかの質問も有。
「なぜ創作に関わるのか?」「どんな人に自分の創作を読んでほしいか?」
「どんなものを書きたい or 読みたいか?」「何に刺激を受けるか?」
以上４つの質問について意見を軽く準備すること。
補足として、参加者ならびにホストからの質問も有。
参加者：緑川、イコぴょん、小野寺、Ｒａｉｎ坊

◆８月定例会
日時：８月４日（土）21 時～
場所：skype チャット
ホスト：神崎
内容：①7月活動報告
②8月の活動について、９月号特集発表
③ホストからの質問
参加者：緑川、小山内
特集は色彩と音響となりました。色彩または音響を意識した作品を形式を問わず募集します。

◆８月合評会①
日時：８月 25 日（土）21 時～
場所：skype チャット
ホスト：参加者で分担
内容：仙人掌：神崎 裕子（8 枚）
水面：芦尾 カヅヤ（41 枚）
アニエス・ラリサにて(1974)：崎本 智（14 枚）
参加者：イコ、小野寺、神崎、カヅヤ（文章）

◆８月合評会②
日時：８月 26 日（日）21 時～
場所：skype チャット
ホスト：小山内豊
内容：夏の予感：小山内 豊（28 枚）

氷片：イコぴょん
悪ふざけ：Rain 坊（9 枚）
参加者：イコ 、小野寺、神崎、牧村

■第 5 回芥川賞読書会
日時：8 月 2 日（木）22:00～
場所：skype チャット
ホスト：6
作品：「終の住処」磯崎憲一郎（第 141 回）
参加者：6、緑川、イコ 、小野寺

■第 7 回芥川賞読書会
日時：8 月 20 日（月）22:30～
場所：skype チャット
ホスト：緑川
作品：「時が滲む朝」楊逸（第 139 回）
参加者： 小野寺、イコ

■第 6 回芥川賞読書会 （補講）
日時：8 月 22 日（水）21:00～
場所：skype チャット
ホスト：イコ
作品：「ポトスライムの舟」津村記久子（第 140 回）
参加者：緑川、神崎

■第 8 回芥川賞読書会
日時：8 月 30 日（木）22:30～
場所：skype チャット
ホスト：あんな
作品：「乳と卵」川上未映子（第 138 回）
参加者： 緑川、6、イコ

■真夏の倉橋由美子読書会
日：8 月 13 日
場所： 京都
ホスト：6
課題図書：倉橋由美子『よもつひらさか往還』
参加者：小野寺、6、神崎

■小説の書き手のための実践的創作企画

①1 行小説→参加者の作品とログはこちら。
8 月 24 日（金）19 時～（約 2 時間）
事前にお題を一人一つ用意しておくこと。

編集後記

はじめての作業が多く、いささか至らない点があったかもしれないと考える。果たしてうまくかけただろうか。（神崎）

刊twitter文芸部八月号（No. 12）

平成二十四年八月一日発行

製作 twitter文芸部

オフィシャルアカウント https://twitter.com/twibun

ホームページ http://twibun.jimdo.com/

執筆者（五十音順）

安部孝作@KOUSAKU_Abe

あんな@annecat1310

常磐　誠@evagredora

本誌はホームページに掲載している「月刊 twitter 文芸部九月号（No.12）」をプリント用に編集し直した物です。記事の無断掲載を禁じます。